

## 駿河湾の深海魚 (13)

### フリソデウオ (その2)

久保田 正 ・ 佐藤 武

フリソデウオ (*Desmodema polystictum*) は、Ogilby, J. D. によってオーストラリアのニューカッスル沖で得た標本により、1897年に新種として発表されました。本種は、東西太平洋、西大西洋、南アフリカ、オーストラリアなどの熱帯域の沖合い中層域から知られています。本来は南の海域に生息する魚ですが日本近海でも採集されています。今までに釧路沖から高知県沖、山口県沖および日本海などから知られ、成魚よりも20cm以下の若魚の採集例が多い傾向にあります。紐体類の間は水深100～800m、時には1,000m位までの深海に生息しています。駿河湾では本種の成魚・若魚ともにサクラエビ漁の網にサクラエビと混獲されたり、若魚が三保海岸に打ち上がったたりして捕獲されています。珍しいので採集されると新聞などで珍魚として報道されます。

本種を含めた紐体類の間は、非常に特徴のある大きな口と眼を有しています。特に口の部分が前方に突き出るように伸長して、正常時の姿とはかなり変わります(図1. a, b)。この構造からみると、餌となる対象生物に対して口の部分を伸長させて海水ごと吸い取り(捕食し)、その後伸びている部分を元に戻しながら飲み込むと考えられます。その食性は、第一鰓弓の鰓耙は短く、数が11～12で少ないことから、甲殻類を主体とした動物プランクトンよりも魚類やイカ類などの小型遊泳生物(マイクロネクトン)の捕食者と考えられます。

日本近海では、本種と近縁種のサケガシラの方が採集例が多い傾向にあります。両種ともに海底の変化を敏感に感じとる能力を持っ

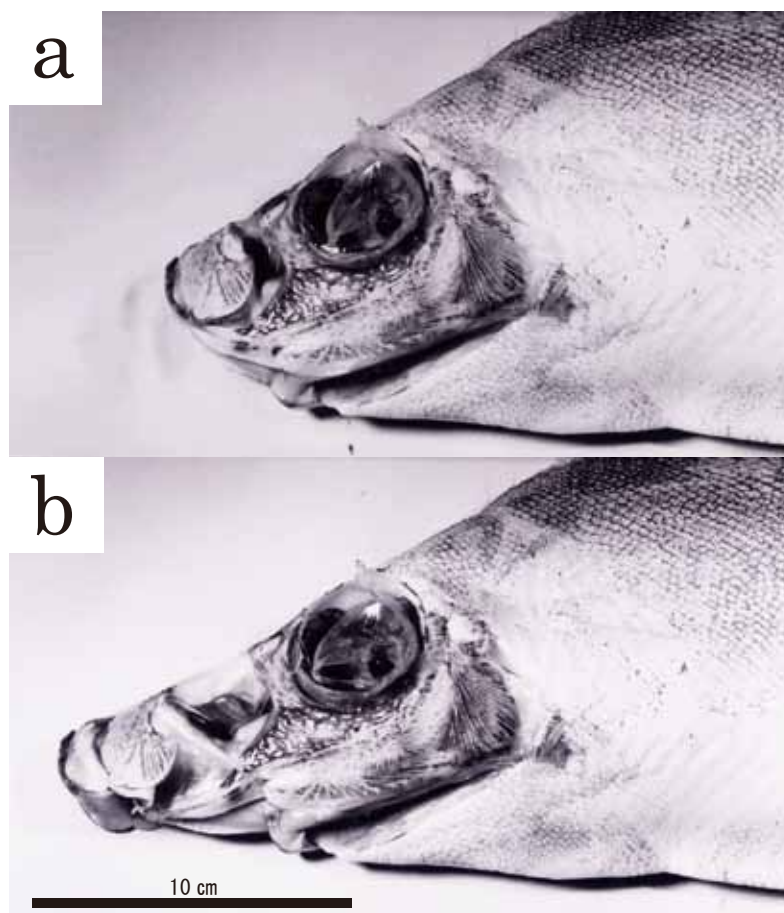


図1. フリソデウオの頭部(左側面)

1973(昭和48)年10月19日 サクラエビ網混獲(由比沖)

a. 正常な状態, b. 口部が伸長した状態

ており、大きな地震の前触れに現れる「地震魚」と呼ばれることもあります。例えば、1983(昭和58)年5月下旬に起きた中部日本海地震前の2～5月には、サケガシラなどの紐体類が日本海側の定置網、建網、打ち上げなどで多数個体が採集され、地震の前触れの異常出現として報告されました。近年、日本海側の沿岸域では刺胞動物大型クラゲ類のエチゼンクラゲ(*Stomolophus*)、軟体動物頭足類のダイオウイカ(*Architeuthis*)や原索動物のホヤ類と近縁なサルパ(*Salpa*)などの生物が次々と異常出現として報道されました。上述した地震前の紐体類の多数個体の出現は、これらと同じように一過性の異常出現だったかも知れません。